

Title	ルカによる福音書15章における三つの譬えについて： Luther訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて(2)
Sub Title	Das Gleichniskleeblatt in Luk. 15, 1-32 : Nach der Lutherbibel und modernen Bibelüber-setzungen (2)
Author	角谷, 善朗(Kakutani, Yoshiro)
Publisher	慶應義塾大学法学会
Publication year	2017
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.138 (2017. 2) ,p.1- 26
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000138-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルカによる福音書 15 章における 三つの譬えについて —— Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて—— (2)

角 谷 善 朗

VI ルカ伝 15 章の第三の譬えの二通りの標題

ルカ伝 15 章の三つの譬えのうちの *das verlorene Schaf* (いなくなった羊) と *der verlorene Groschen* (無くした銀貨) の譬えについての調査報告¹⁾は既に済ませて、今回は *der verlorene Sohn* (いなくなった〔放蕩〕息子) の譬えについての報告を行なう。

因みに、斯かる標題は、旧約及び新約の古典語原典、更に Luther 訳原典及び Zürcher Bibel 原典においては、一切付けられていないのであって、Luther 訳聖書の場合は、1912 年の現代語改訂版²⁾に至って初めて、ギリシア語原典³⁾の *ἀπώλλυμι* に因んで成立して、表示されているのである。

さて高地と低地の古ドイツ語は、第二次子音推移が行なわれたか、或は行なわれなかったかに依って、古高ドイツ語と古低ドイツ語に分かれた。斯くして両者の相違は顕著になったのであった⁴⁾。そして古低ドイツ語は更に分化して、そのうちの西低フランク語からオランダ語が成立した⁵⁾のである。斯様にオランダ語はドイツ語の一方言から発達したのであるから、双方は互に極めて親ちかしい関係にあると指摘⁶⁾されている。

ところでオランダ語訳の新約の調査に当たって、1522 年刊行の Septemberbibel に先んじて刊行されたオランダ語訳の新約⁷⁾及び Septembibel のオランダ語版にして、翌 '23 年に出版された 3 点の新約聖書⁸⁾は、何れも参照することは叶わなかった次第である。

それ故に今回調査の対象は、1928 年⁹⁾、'30 年¹⁰⁾、そして '51 年¹¹⁾に刊行された 3 点に限られることになった。尚 '30 年と '51 年の版のルカ伝の当該箇所
の訳文は、'28 年のものが受け継がれているのである。

Luk. 15, 6

want ik heb mijn schaap gevonden, dat verloren was. (1928)

Luk. 15, 9

Want ik heb den pennig gevonden, dien ik verloren had. (1928)

Luk. 15, 24

Want deze mijn zoon was dood, en is weder levend geworden ; en hij was verloren, en is gevonden! (1928)

Luk. 15, 32

want deze uw broeder was dood, en is weder levend geworden ; en hij was verloren, en is gevonden. (1928)

want : dann, gevonden : vinden (= finden) の過去分詞, verloren : verliezen (= verlieren) の過去分詞, dood : tot, en..., en¹²⁾... : sowohl...als (od. wie) [auch]...

尤も三つの譬えの標題は、'51 年の版において初めて付けられているのである。

即ち Gelijkenis van het afgedwaalde schaap, en van den verloren penning, gelijkenis van den verloren zoon であって、三つのうち二つが、1912 年の Luther 訳現代語改訂版のものと共通する表現となっている点は注目される点である。

Gelijkenis : Gleichnis, afgedwaald : afdwalen の過去分詞, afdwalen¹³⁾ : irregehen ; verirren ; auf Abwege gerathen.

英訳聖書については既に当該箇所の引用も添えて、報告を終えている通り、1611 年の欽定訳聖書 (The Authorised (King James) Version = KJV) において夙に標題は付けられていて、原典の ἀπολλυμι に沿った the lost sheep, the lost coin そして the lost son が明示されている。然るに 1901 年のアメリカ標準訳聖書 (American Standard Version = ASV) に至って the lost coin は the lost piece of Silver に、the lost son は lost が prodigal (= verschwenderisch¹⁴⁾) に差し替えられて、これまで

と大きく異なった表現, the Prodigal Son に, 変更されているのである。そして 1952 年の改訂標準訳聖書 (The Revised Version = RSV) においては, 標題は The Prodigal Son だけに絞られていて, 残る二つは表示されていないのである。

さて KJV (1611) から約 1 世紀後, 18 世紀初頭に刊行された Daniel Defoe (1660–1731) の Robinson Crusoe (1719) の出だしの部分で, Prodigal が用いられているのである。

like a true repenting Prodigal¹⁵⁾

本書に添えられている語釈においても, Prodigal はルカ伝 15 章と関連している表現であると指摘されているのである。

repenting Prodigal : The allusion is to Christ's parable of the prodigal son, Luke 15 : 11–32¹⁶⁾

この事実は, the prodigal son は 18 世紀初めには早くも, 一般化していることを証するものであると解されるのである。なお Defoe はここでは prodigal を名詞に使っているのであって, この件については, H. Bradley の指摘を註 24) で明らかにしている。

ところで the prodigal son に対応している邦訳は, 広く流布している放蕩息子である。そのうえ放蕩息子は三つ目の譬えの標題の定訳としても容認され, 普及しているのであって, ドイツ語の der verlorene Sohn 及びオランダ語の de verloren zoon にさえ対応されているのである。

独和中辞典¹⁷⁾(研究社刊)においては, verloren の語釈で「なくなった, 紛失した」の用例のうちに, der verlorene Sohn が引用されていて, 「(後悔して帰って来た) 放蕩息子 (ルカ 15, 11–32)」が当てられていて, 講談社オランダ語辞典¹⁸⁾においても, de verloren zoon には「放蕩息子」が対応されているのである。

放蕩息子と記載している聖書並びに聖書の註解書更に文学及び思想関係の書は枚挙に遑がない程であるが, 現行の文献のうちには, いなくなった息子が対

応されているものも挙げる事が出来る。

これに関するのは、Ralph Earle のルカの福音書の註解書 (The Gospel According to St. Luke¹⁹⁾) であって、15 章の標題は the lost sheep, the lost coin そして the lost son である。その邦訳である横山容子訳²⁰⁾は「失われた羊」, 「失われた銀貨」そして「失われた息子」を対応しているのである。

現行の英訳聖書においては、the prodigal son が専らであるのに比して、R. Earle が the lost son と記しているのは注目に価するところである。これは R. Earle が三つの失われたものの譬えの解説に当たって、John Albert Bengel の Gnomon of the New Testament Translated by A. R. Fausset 1860 で述べられている解釈を正鵠を射たものとして、これに準拠していることに依ると思われる。更にまた J. A. Bengel の原著を直接に参照することは叶わなかったのであるが、それにも拘わらず同書においては、das verlorene Schaf, der verlorene Groschen そして der verlorene Sohn と記されていると推定し得るのである。

そこで次に、Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament²¹⁾の邦訳であるギリシア語 新約聖書釈義事典を参照すると、原著の der verlorene Sohn には、失われた「放蕩」息子」を対応しているのである。

既に英訳聖書において確かめられた通りに、前の二つの譬えの標題と同様に、ἀπολλύμι に因んで成立した the lost son は、後に the prodigal son に取って代わられ、現在では the prodigal son が圧倒的に用いられているのである。

「放蕩息子」の譬えにおいては、前の二つの譬えで羊或いは銀貨を通じて教えが説かれているのに対して、三つ目に至っては物言う人の間の出来事を基にして、構成されているのであって、これで論しは頂点に達して、完結しているのである。然ればこそ第三の譬えの標題の表示に当って、末の息子はその言行が譬えの要となっているのであるから、放蕩息子として取り入れていると諒解されるのである。

三つの譬えにおいては、先ず羊、次に銀貨そして末の息子の三者のうちの何れでも、「失われた」場合でも、換言すれば人が神から遠く離れた、由々しい事態に陥って仕舞った場合でも、この時こそルカ伝 19 章 10 節のイエスの言葉、「人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである²²⁾」の通

りに、神は決して見棄てないで、「失われた」者を捜し出して、救済に当たって、見付け出して心底から歓ぶという神の計り知れない慈愛の念を説いているのである。

「失われた」は羊、銀貨そして末の息子に一様に冠されて、三者は共通して深刻な状況に置かれていることを伝えている。そのうちで「失われた息子」の譬えは、前の二つの譬えと比較してみると、最も具体的で然も切実な問題を取り扱っているところから、取り分け出色のものであると判断されるのである。そこでこの譬えの標題を「失われた息子」としていることは、正に当を得ていると思われるのである。

とはいえ「失われた息子」の使用頻度は著しく減じている。だからといって等閑に付することは慎まなければならないと思う次第である。

斯かる状況を鑑みると、Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament の der verlorene Sohn の邦訳に、「失われた〔放蕩〕息子」の二通りを当てているのは適切な対応であると思われる。

次いで the prodigal son の由来についての調査結果を報告したい。市川・西川・清水編「英語引用句辞典²³⁾」における the prodigal son の項の記述は、Henry Bradley の The Making of English 1951. の the prodigal son についての指摘²⁴⁾を全面的に受け入れて、全文を引用しているのである。

Bradley は the prodigal son について、本文に添えた脚註 footnote のなかで、「厳密に言へば聖書の句ではなくて、初期の聖書註解者達の使ったラテン語から派生したものである…。²⁵⁾」(strictly speaking, a Bible phrase, being derived from the Latin of early commentators;) と指摘している。然るに「初期の聖書註解者達の使ったラテン語」の具体例について、惜しむらくは Bradley においても、「原書にない事項に関して巻末で解説している」大塚高信訳においても取り上げられていないのである。

さて prodigal の語源はラテン語の prodigus に溯る²⁶⁾ことが出来る。prodigal に対応するフランス語は prodigue であって、prodigue の語源も prodigus に求められる²⁷⁾のであるから、この 2 語は同じ語源に由来しているのである。

次いでフランス語訳聖書における三つの譬えの標題について報告したい。フ

ランス語聖書のうちで調査の対象としたのは、2009 年刊行のエルサレム新約聖書 (La, Bible de Jerusalem 20 Siècles D'art Le Nouveau Testament) である。

エルサレム聖書は、「おそらく、聖書翻訳史上、最高の貢献の一つとして今後長く評価され続けることになろう²⁸⁾」と見做されている訳業であって、フランス語圏カトリックの聖書学者が中心となっているエルサレム聖書学院が主宰する聖書翻訳活動の所産である。エルサレム聖書学院の活動は、先ずは個々の聖書研究者の個人訳を次々と刊行することが専らであった。そして次にこれらの訳業を一巻に凝縮して、共同訳聖書の作成を新たな活動の目標として、1956 年に完訳聖書を刊行したのであった。1973 年にはそれ以降の研究成果を取り入れて、改訂版も公にしている。

エルサレム聖書のルカ伝 15 章における三つの譬えの標題は、La brebis perdue, La drachme perdue, Le fils perdu et le fils fidèle であって、三つの標題は何れも本文の中で用いられている perdue と結合している表現である。

Lu 15, 6

ma brebis qui était perdue!

Lu 15, 9

la drachme que j'avais perdue!

Lu 15, 24

il était perdu et il est retrouvé!

Lu 15, 32

il était perdu et il est retrouvé!

perdu : verloren, fidèle : (ge)treu, était : être の直説法半過去, j'avais : avoir の直説法半過去, il est : être の直説法現在, retrouver²⁹⁾ : wieder finden.

次に三番目の譬えが le fils perdu に le fils fidèle が続けて記されている点が注目される。「いなくなった息子」と「従順な息子」を標題としているのは、二人兄弟の言行の隔たりを巧みに且つ、端的に示している表現として、高く評価されられるのである。

更に Le fils perdu et le fils fidèle には、l'enfant prodigue が並んで挙げられている。l'enfant prodigue は le fils prodigue と同義で用いられているのであるから、正

しく the prodigal son に対応する表現である。

然れば *l'enfant prodigue* が初めて用いられた文書とその発行の時期を明らかにすることが、次なる問題点である。

この件に関して、W. v. Wartburg の語源辞典³⁰⁾及び Dauzat-Dubois-Mitterand の語源辞典³¹⁾の双方で、1560 年刊行のフランス語訳聖書においてであるとする同一の見解を示している。更に W. v. Wartburg は、1560 年刊行の Bible Reb. のルカ伝 15 章の解題 (Kapitelschrift) においてである旨、一段と詳しく報告しているのである。

三番目の譬えの二通りの標題について、各々の成立の由来を探って、報告を済めたので、次に三番目の譬えで、教え導いているところを話の展開に沿って検討して行くことにする。

Ⅶ いなくなった〔放蕩〕息子の譬え

1 弟の出立

「いなくなった羊」では羊、「無くした銀貨」の銀貨では銀貨を探し求めることに準えて、罪人^{つみびと}の救済の教えを説いているのである。いずれの譬えも当時の人々の暮しに深く根差しているものである。

さて「いなくなった〔放蕩〕息子」では、口が利ける人を登場させて、三名の登場人物各人に己の思うところを率直に語らせていると共に、救済に至るまでの諸段階では、当時の社会の慣習或いは通念が巧みに織り込まれ、活用されているのである。

この譬えは社会通念に反しているものの、併しありそうな出来事を題材にして構成されていて、譬え話を展開して行く語り口は正に劇的であって、聴衆の心をイエスの罪人救済^{つみびと}の教え^{いざな}に誘って止まないものである。

「いなくなった〔放蕩〕息子」はイエスの数多い譬えのうちで、イエスの教えの核心に触れたものとして、名実共に「たとえ話の王³²⁾」と呼ばれているのである。

さてこの譬え話は、二人兄弟の弟が自分勝手に生きたいという衝動³³⁾に駆ら

れて、父が未だ存命であるにも拘わらず、父に財産の分割を要求するところから始まる。遺産の分割に関しては、旧約外典のシラ書〔集会の書³⁴⁾〕(Das Buch Jesus Sirach・Ekklesiastikus) 第 33 章 20・24 節に、「息子や、妻、兄弟や友人であっても、お前が生きているかぎり、お前の上に権力を振るわせるな。また他人に財産を与えるな。さもないと、後悔して取り戻したくなる。… お前の寿命が尽きる日、息を引き取る時に、財産を譲り渡せ³⁵⁾。」と述べられている様に、父の死後に行なうのが慣例であるのであるから、弟の要求は慣用の枠から完全に外れる (aus dem Rahmen des Üblichen völlig herausfallen³⁶⁾) ことなのである。

にも拘わらず父は次男の要求に応じてやるのである。これは人の自由を重んじるために外ならない。人は自由を与えられたからには、自分の罪に責任が生ずることになるのであるからである³⁷⁾。

弟は分け前を手にすると、豚が飼われている異境へ出掛けて行く。豚はユダヤの人々にとって汚れの化身 (Das Schwein ist dem Juden der Inbegriff der Unreinheit³⁸⁾) なのである。斯かる異境へ出向くのは父親の干渉から逃れたいためであったが、同胞と神の民の法と秩序を振り捨てる (Gesetz und Ordnung seines Volkes, des Gottesvolkes über Bord werfen³⁹⁾) ことでもあるのである。

神を畏れない弟は、その地で放蕩三昧に過ごして、財産を使い果たして仕舞うのである。

この譬え話の標題として「放蕩息子」は、「いなくなった息子」よりも遙かに一般的であるが、「放蕩息子」という表現の成立には、この個所が深く係わっていると推定されるので、13 節の後半の部分を、先ずギリシア語の原文を、ドイツ語の逐語訳を添えて引用して、次いで諸国語の訳業を対比して検討して行きたい。

καὶ ἐκεῖ διεσκόρπισεν τὴν οὐσίαν αὐτοῦ ζῶν
und dort verschleuderte er — seine Habe, lebend
ἀσώτως.
zügellos⁴⁰⁾. (Luk. 15, 13)

Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament とその日本語版⁴¹⁾においては、*δισεκορπισεν* には (Vermögen) vergeuden, verschwenden ; (財産を) 使い果す, 浪費するを, *ἀσώτως* には licherlich ; 放埒に, を対応している。更に der verlorene Sohn については, Lk 15, 13 vom „V. Sohn“, der sein Vermögen durch ein licherliches Leben (*ξωνά*) verschleuderte : ルカ 15 : 13 で「失われた〔放蕩〕息子」に関して, 彼は〈放蕩生活〉(*ξωνά*) によってその財産を浪費したと解説しているのである。なお der verlorene Sohn に二通りの訳語を対応させている点が注目されるが, これについては既に検討したところである。

諸国語訳の新約聖書の訳業のうちで, 先ず最初に取り上げるのは, 聖 Hieronymus に依る Vulgata⁴²⁾ に収められているラテン語訳である。Vulgata は翻訳聖書の比較検討に当って必須の調査資料となるものであって, 言わば建物の礎石と見做せるのである。

et ibi dissipavit substantiam suam vivendo luxuriose.

luxuriose は verschwenderisch⁴³⁾ の意味を, *ἀσώτως* も von schwelgerischer, verschwenderischer Lebenshaltung⁴⁴⁾ の意味を担っているのであるから, luxuriose は *ἀσώτως* に対応して用いられているのは明らかである。

次に Luther 訳原典⁴⁵⁾ 及び Zürcher Bibel 原典⁴⁶⁾ においては, 次の通りに訳出されているのである。因みに Zürcher Bibel は旧約並びに新約の原文を厳密に踏まえた, 然も平明を旨とした訳業であって, Luther 訳聖書に比肩すると評価されている。

vnnd daselbs bracht er seyn gutt vmb, mit brassen, (1522.¹⁾)

vnd daselbs bracht er sein gut vmb mit brassen. (1546.)

vnnd daselbst verthet er seyngût mit brassen. (1531.)

この 3 例の引用文中の brassen, umbringen, verthun の語義について, Grimm の辞典に拠って記述することにする。

先ず brassen, prassen⁴⁷⁾ については, heluari, schlemmen und demmen, schwelgen を

当てて、例証のうちに Luther 訳新約のルカ伝 15 章 13 節の 1 例とユダの手紙 12 節の 1 例を収めているのである。

dise unfläter passen von euren almosen one scheu. Judä 12

次に umbringen⁴⁸⁾ について、主に 16 世紀及び 17 世紀、特に Luther において、財産まれには時間の浪費を表わす durchbringen, verprassen, vergeuden の意味を担って用いられていると指摘している。

そして verthun⁴⁹⁾ について、meistentheil ‘ohne noth und auf unnütze art verwenden’, ... verthun ist allgemeiner als durchbringen, verschwenden, vergeuden, verschleuden Eberhard–Lyon nr. 392. と説明しているのである。

Luther 訳原典の訳文は、1522 年の初版のものが ’46 年の版に至るまで、一貫して受け継がれているのであって、そして更に 1912 年の現代語改訂版においても、一切変更されることなく保持されているのである。

und daselbst brachte er sein Gut um mit Prassen. (1912.)

併し乍ら 1984 年の最新の現代語改訂版⁵⁰⁾に至って、現代語に即した大幅な改訂が加えられて、umbringen は durchbringen に書き替えられているのである。

und dort brachte er sein Erbteil durch mit Prassen. (1984.)

Zürcher Bibel に関しても、1931 年の現代語改訂版⁵¹⁾において、大規模な改訂の所産を確かめることが出来るのである。

und dort vergeudete er sein Vermögen durch zügelloses Leben. (1531.)

さて次にオランダ語訳聖書の訳出について述べる。引用する訳文は、既に報告を済ませた二つの譬えの場合と同様に、1928 年刊行の現代語訳のものを取り上げる。’28 年の版の訳文は、’30 年の版及び ’51 年の版に受け継がれている

のである。

en heeft aldaar zijn goed doorgebracht, lebend overdadiglijk (1928)

en : und, heeft : hat, aldaar : da, zijn goed : sein Vermögen, doorgebracht : doorbringen の過去分詞, doorbringen : durchbringen, overdadiglijk⁵²⁾ : verschwenderisch.

1611 年の欽定訳聖書 (The Authorised [King James] Version = KJV), 1901 年のアメリカ標準訳聖書 (American Standard Version = ASV) 及び 1952 年の改訂標準訳聖書 (The Revised Standard Version = RSV) の訳文は, 順次引用すると次の通りである。

and there (the younger son) wasted his substance with riotous living. (KJV)

and there he wasted his substance with riotous living (ASV)

and there he squandered his property in loose living. (RSV)

substance : Hab und Gut, riotous : (dissolute) ausschweifend, loose⁵³⁾ : licherlich (Leben [swandel]).

各々の聖書の改訂は, それぞれの時期の英語の状況を如実に反映している綿密な改訂作業の所産であることが, 視られるのである。

フランス語訳聖書, 即ちエルサレム聖書 (La Bible de Jerusalem 20 Siècles D'art) においては, 次の様に訳出されている。

et y dissipa son bien en vivant dans linconduite.

dissiper : verschwenden ; vergeuden, son bien : sein Vermögen, vivant : lebend, inconduite⁵⁴⁾ : unordentliches Leben ; Licherlichkeit.

ルカ伝 15 章の三つ目の譬えに対する標題に, ドイツ語では der verlorene Sohn, オランダ語では de verloren zoon が当てられているのに比して, 英語では the prodigal son, フランス語では de l'enfant prodigue が専ら用いられているのである。

ドイツ語とオランダ語の verloren は ἀπóλλυμι に由来している⁵⁵⁾のに対して,

prodigal 並びに prodigue は、語源は等しくラテン語の prodigus であるから、何れも verschwenderlich の意味を担っている⁵⁶⁾のであって、更にまた prodigus の語義も無論 verschwenderlich である⁵⁷⁾ところから、prodigal と prodigue は prodigus と語形及び意味の両面で深く関連していることは明らかである。

13 節文末の ἀσώτως は schwelgerisch, verschwenderlich の意味を担っている⁵⁸⁾のであるから、prodigal と prodigue 即ち prodigus との係わりが注目されるのである。ἀσώτως と prodigus は何れも verschwenderlich を意味しているのであるから、譬え話の展開の上で言わばキーワードとして、大きな役割を果たしているのである。とは言えラテン語聖書を代表する Vulgata で ἀσώτως に対応しているのは、prodigus ではなくて、luxurose なのである。luxurose の意味も verschwenderlich⁵⁹⁾であって prodigus と同義であっても、語形に則してみると prodigal 及び prodigue は luxurose に由来していると言い難いのである。

the prodigal son は「初期の聖書註解者達の使ったラテン語から派生したものである⁶⁰⁾」と指摘されていて、この指摘は l'enfant prodigue にも当て嵌まるものであると諒解されるのである。然るに原著と邦訳⁶¹⁾の何れにおいても、そのラテン語の表現は具体的に報告されていないのである。そこで ἀσώτως のラテン語訳は prodigal と prodigue の語源で有り得るか否かについて、確かめる必要に迫られて調査を試みた次第である。

2 弟の破滅

さて弟は己の無分別の報いを受けて、無一文に零落した上に、ひどい飢饉にも見舞われて、遂に豚の群れの番をする迄になって仕舞うのである。

豚は蹄は分かれているものの、反芻しない動物であるから、モーセは汚れたものに区分けして、その肉を食してはならないと定めている（レビ記 11 章 7, 8 節⁶²⁾及び申命記 14 章 8 節）のであって、イエスもまた犬と豚に嫌悪の念を抱いている（マタイ伝 7 章 6 節⁶³⁾）のであるから、豚はユダヤ人にとって汚^{けが}れの化身である（Das Schwein ist dem Juden der Inbegriff der Unreinheit⁶⁴⁾）のである。

それ故にユダヤの諺に、「豚を飼う者は禍なるかな」（Verflucht sei der Mann, der Schweine züchtet⁶⁵⁾）がある様に、豚飼いは汚れた動物の世話をしなければならな

いのであるから、豚飼いの仕事はユダヤ人にとって最も蔑まれた仕事であったのである。

弟はその豚飼いに雇われた上に、空腹の余り豚の餌で飢えを凌ごうと願うものの、それさえも誰も恵もうとしなかったのであるから、悲惨極まりない状況に陥って仕舞ったのである（15, 16 節）。

καὶ ἐπεθύμει χορτασθῆναι ἐκ τῶν κερατίων ὧν
und er begehrte sich zu sättigen von den Schoten, die
ἦσθιον οἱ χοῖροι, καὶ οὐδεὶς ἐδίδου αὐτῷ. (Luk. 15, 16)
fraßen die Schweine, und niemand gab ihm⁶⁶⁾.

さてギリシア語原典の *κερατίον* の語義について、Bauer–Aland の Wörterbuch zum Neuen Testament⁶⁷⁾ は、d. Schote, im Pl. v. den Früchten d. Johannisbrotbaums...Luk 15 16 (als Schweinefutter Lycophon v. 675 bis 678) と説明している。

そして Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament⁶⁸⁾ における語釈は、Schote：豆，die Früchte des Johannisbrotbaums：いなご豆であるから、Bauer–Aland と一致しているのであるが、更に Luther Treber：ルター訳かす を加えているのである。

尤も Luther が *κερατίον* に Treber を対応しているのは、1530 年の版からのことであって、それ以前の初版から '27 年の版までは、Triester, Trester と訳出されている⁶⁹⁾ のである。

vnd er begerte seynen bauch zu fullen mit triestern, die die Sew assen, vnd niemant gab sie yhm. (1522.¹ Luk. 15, 16)

Vnd er begerte seinen Bauch zu fullen mit trebern, die die Sew assen vnd niemand gab sie jm. (1546.)

Zürcher Bibel 原典においては、*κερατίον* に krüsch を対応している。krüsch⁷⁰⁾ は Luther 訳新約原典の triester 及び treber が、Baseler nachdruck において krüsch

に言い換えられている語形であって、Zürcher Bibel 原典にも受け入れられているのである。因みに krüsch は男性，女性，中性の三つの性を併有していて，語義は *kleie : der Balg des Getreidekorns* と説かれている。

Vnd er begärt seinen bauch zefüllen mit krüsch / das die stüw assend. Vnd niemants gab sy jm. (1531.)

830 年頃にラテン語訳から重訳された総合福音書の Althochdeutscher Tatian が嚆矢となって，画期的な Lutherbibel 及び Zürcher Bibel を経て，近代そして現代ドイツ語訳新約聖書に至るまでの約 1200 年間に亘って，数多くの新約のドイツ語訳が企てられて，その成果が刊行されて来たのである。

そして各々の翻訳活動を推進して行く過程において，*κερατίον* の解釈とそれを踏えた訳語の選択の件は極めて重要な課題の一つである。

然ればこの件について，各々の訳業の成果を調査し検討を加えた次第であって，その結果についても報告に含めることにしている。

次に 16 節の文末の *καὶ οὐδεὶς ἐδίδου αὐτῷ* の訳出に関して，先に取り上げた 4 点の現代ドイツ語聖書⁷¹⁾における訳出は 4 点全てについて，Lutherbibel 及び Zürcher Bibel 双方の訳出に沿ったものになっているのである。

...an den Schoten des Johannesbrotbaumes, welche die Schweine als Futter bekamen, doch niemand gab sie ihm. (Menge 1961)

...mit den Schoten, welche die Schweine fraßen, und niemand gab sie ihm. (Rengstorff 1966)

...mit den Futterschoten, die die Schweine fraßen, aber niemand gab ihm davon. (Einheitsübersetzung 1976)

, daß er auch mit dem Schweinefutter zufrieden gewesen wäre ; aber selbst das verwehrte man ihm. (Die Gute Nachricht 1984)

そして各種の邦訳聖書においても，上記のドイツ語訳聖書に連なる延長線上に位置する訳出が行なわれているのである。その邦訳聖書を具体的に挙げると，日本聖書協会の文語訳⁷²⁾及び口語訳⁷³⁾，日本聖書刊行会の新改訳⁷⁴⁾，塚本

虎二訳⁷⁵⁾、岩隈 直訳⁷⁶⁾の 5 点である。

かれ豚の食う蝗豆^{くら}にて、己が腹を充さんと思ふ程なれど、何をも與ふる人なかりき。(文語訳 1887)

彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満したいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。(改訳 1954)

だれひとり彼に与えようとはしなかった。(新改訳 1965)

彼はせめて豚の食う蝗豆で腹をふくらししたいと思ったが、それすら呉れようとする人はなかった。(塚本訳 1963)

彼は豚が食べていたいなご豆で自分の腹を満したいと切に思った。がだれも彼に(それさえ)くれなかった。(岩隈訳 1991)

そして文語訳に続く口語訳、新改訳、塚本訳そして岩隈訳においても *κεραπίον* は蝗(いなご)豆と訳されているのである。

然るにフランシスコ会聖書研究所に依る訳業⁷⁷⁾においては、これ迄に列挙したドイツ語訳聖書並びに邦訳聖書の訳文とは、著しく相違した解釈を拠り所としている訳文が記載されているのである。即ち、

かれは、豚の食べるいなご豆で空腹を満したいほどであったが、食べ物を与えてくれる人はだれもいなかった。

であって、在来の豚の餌(えさ)とは、大きく異なる食べ物に改められているのである。

そこで斯様な解釈が成立し得る根拠については、「放とうむすこは、自由に食べることのできるいなご豆を、なぜ食べなかったのかという疑問が残るが、これは不浄な動物とみなされている豚の食料を食べるのに忍びなかったからであろう⁷⁸⁾。」と説明して、弟を蝗豆を食するなど思いも寄らない人と想定していると判断した上で、この様に訳出していると推測されるのである。

そして新共同訳⁷⁹⁾の邦訳においては、フランシスコ会聖書研究所の訳出に倣っているのである。

彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも、腹を満たしたかったが食べ物を与える人はだれもいなかった。

新共同訳は Einheitsübersetzung の日本語版であるのであるから、原著と邦訳の解釈は不可分の関係にあって、乖離するものではないと言い得るのであるけれども、ルカ伝 15 章の当該箇所訳出に関しては、Einheitsübersetzung と日本語版の解釈は相容れないものになっているのである。

更に田川建三訳⁸⁰⁾においては、男性否定代名詞は直前に出て来る男性名詞を受ける機能があることを指摘して、この原文で主語である οὐδεὶς は、直前に出て来る χοῖροι を受けているに過ぎないと説明して、これ迄とは全く別様の解釈を踏えた訳文を明らかにしている。

そして息子は豚が食ういなご豆で腹を満たそうと思ったのだが、豚がゆずってくれなかった。(田川訳 2011)

16 節の文末の箇所には三通りに解釈される可能性があって、それ故に三通りの訳出が成立することは、正に注目に値する問題であるので、先ず報告しておく次第である。

さて κεράτιον は地中海沿岸各地の平地に分布する蝗豆の木に実る角形の莢である。熟して褐色になると、ペースト状の果肉は多量の糖分を含んでいるので、非常に甘い⁸¹⁾。若い莢では少し渋みがあるが、食感は干柿に似ていると云うことである⁸²⁾。併し乍ら莢を食していたのは、奴隷や下層階級の者に過ぎなかったのである。莢は丸ごとか或いは発酵飲料に加工される果汁を搾り取った残り滓が、豚や牛馬に飼料として与えられて、悦んで食されていたのである⁸³⁾。してみると Luther 訳原典における Triester, Trester そして Treber に拠る対応、並びに Zürcher Bibel 原典における、これらの言い換えの krüsch に拠る対応は、何れの訳語についても、der bei der Wein-und Bierbereitung zurückbleibende feste Rückstand von ausgepressten pflanzlichen Stoffen, der als Vieh-, insbesondere Schweinefutter verwendet wird⁸⁴⁾ の意味を担っているものであって、蝗豆の実際の処理の仕方を存分に反映しているものである。したがって Luther

原典並びに Zürcher Bibel 原典の対応は当を得たものであると言えることが出来るのである。

オランダ語訳聖書においては、1928 年、'30 年の版そして '51 年の版を通じて、一様に Draf (= ausgesottener Malz [der Bierbrauer⁸⁵⁾]) が対応している。この対応もドイツ語訳聖書の対応に準じるものと思われる。

En hij begeerde zijnen buik te vullen met den draf, dien de swijnen aten ; en niemand gaf hem dien. (1928)

buik : Bauch, vullen⁸⁶⁾ : füllen.

次に英訳聖書の場合は、1611 年刊行の欽定訳 (KJV) と時代が下った 1901 年刊行のアメリカ標準訳 (ASV) とでは、訳出の変更は一切行なわれず、κερατίον には husk (= shale⁸⁷⁾) が当てられているのである。

And he would fain have filled his belly with the husks that the swine did eat : and no man gave unto him : (1611)

併し乍ら '52 年刊行の改訂標準訳 (RSV) に至って、訳文は書き換えられ、husk も pod (= Hülse⁸⁸⁾) に改められているのである。

And he would gladly have fed on the pods that the swine ate ; and no one gave him anything. (1952)

husk 或いは pod に依る対応は、英訳聖書特有のものである。

そしてエルサレム聖書 (2009 年刊) においては、caroubes (= Johannisbröt⁸⁹⁾) と訳出されて、ここで初めて蝗豆の実と結び付けられた訳語が用いられているのである。

Il aurait bien voulu se remplir le ventre des caroubes que mangeaient les cochons, mais personne ne lui en donnait. (2009)

avoir : Hunger, Durst haben, vouloir : wünschen, remplir : füllen, ventre : Bauch,

manger : auffressen, cochon : Schwein, donner⁹⁰⁾ : geben.

さて弟は自らの力を過信して、神に逆らって故郷を出て行く。異境での生活は、始めは快適で自由であると思われたのであったが、それも暫しのことで程なく、悲惨、且つ屈辱的な状態に変わったのである。即ち不浄な豚の世話をし、その上空腹に耐えかねても豚の食する蝗豆さえ口にすることが出来ない状態に立ち至ったのである。

斯かる事態に至って、弟は漸く改悛の念に駆られ、また父の下での豪勢な暮らしを思い起こした。そして自分が天（即ち神）に背いて、父に対して罪を犯したことを悟り、父の下に戻って、自分の罪の許しを請うことを決意するのである（17, 18 節）。

εἰς ἑαυτὸν δὲ ἐλθὼν⁹¹⁾ ἔφη· πόσοι μίσθιοι

In sich aber gegangen, sagte er : Wieviele Tagelöhner

τοῦ πατρός μου περισσεύονται ἄρτων ... ἀναστάς

-meines Vaters haben Überfluß an Brot Mich aufgemacht habend,

πορεύσομαι πρὸς τὸν πατέρα μου καὶ ἔρῳ αὐτῷ·

will ich gehen zu – meinem Vater und will sagen zu ihm :

πάτερ, ἡμαρτον εἰς τὸν οὐρανὸν καὶ

Vater, ich habe gesündigt gegen den Himmel und

ἐνώπιόν σου⁹²⁾, (Luk. 15, 17, 18)

vor dir,

Albrecht Dürer (1471–1528) は、銅版画 *der verlorene Sohn* (1496 年頃⁹³⁾) にあって、何匹もの大小の豚が群がっている餌箱 (Trog) の傍で、両手を組み合わせて、心身ともに弱り果て、天を仰いでいる弟を描いている。

巧みな画法に依って、生活環境の余りの変わり様に、絶望感と孤独感に打ち拉がれ乍らも、帰郷 (= 悔い改め) を未だに決め兼ねている弟の心の内を、如実に伝えているのである。

とはいえ餌箱の中に κεφατίον が全く描かれていないのであって、精密な描写に徹しているだけに、蝗豆が顧みられていないのには、意外な印象を受けざ

るを得ないのである。

ユダヤには、人は落ちるところまで落ちると、迷いから醒めることを教えている諺が二つある。それとは、「ユダヤ人がいなご豆を食べざるを得なくなったときには、悔い改めるようになる」と「(外国に行った) 息子が(貧乏のために) はだしで歩くようになると、その時父の家の心地良さを思い出す」である。

この二つの諺は、先に第 6 章において報告している R. Earle の The Gospel According to St. Luke の中で引用されている⁹⁴⁾けれども、何れもユダヤの人々の生活に滲透していて、周知のものであることは疑う余地はないのである。

なお「ユダヤ人が……」に相当するドイツ語の表現として、次のものが得られる⁹⁵⁾。

Wenn der Jude auf die Früchte des Johannisbrotbaums angewiesen ist, dann kehrt er um.

これに対して「息子が……」に相当するドイツ語の表現は、Karl Friedrich Wilhelm Wander : Deutsches Sprichwörterlexikon 5 Bde. Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1876 1963. を参照しても、見出すことは叶わなかったのであるから、此の度は報告するに至らなかった次第である。

この二つの諺の教えは、弟の境遇の変化とそれに伴う心境の変化の譬え話と、表裏一体をなすものであって、文字通り符合しているのである。

諺は民衆の生活のなかで、実際に体験された知恵が結晶したものであって、その主眼は教訓に置かれているのである。それ故に数多い人々を対象として、そのうちの誰にも当て嵌まる、身近かな事柄を主題として取り上げて、それに係わる教訓を簡潔にして平明な表現で、教えているのである。その上に諺の論しは、的を射た且つ傾聴に値するもの (Allgemeingültigkeit⁹⁶⁾) であるので、民衆に受け入れられて、生活に溶け込んでいるのである。

諺は斯様に、含蓄に富み且つ人口に膾炙しているものであるから、イエスは二つの諺の力を活用することとして、いなくなった息子の譬えの骨子として取り入れて、これに特定の登場人物と状況を設定して肉付けて、身近かな出来事

として構成して、説得力豊かに物語を展開して行くのである。

斯くて 16 節に至って弟は帰郷の念に駆られて、父の下で雇い人並みに働かせて欲しいと願う程へりくだった態度を取る様になる。そこで父は息子の無事を殊の外悦んで、祝宴を催して歓待するのである。

ところで兄はこの様子をまのあたりにして、父に陰日向なく尽くして来たのに、この様に^{ねざら}労われたことは一度もないのであるから、父の接しかたの違いに不満をあらわにする。これに対して父は諄々と諭して行こうと努める。

この件を^{くだり}記述している 16 節から最終の 32 節に至る迄の各節の調査研究の結果については、稿を改めて報告することにしたい。

(2016・10・21)

註

- 1) 角谷善朗「ルカによる福音書における三つの譬えについて ― Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて ― (1)」教養論叢 第 137 号 2016 年 2 月。
- 2) Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testament nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers nach dem 1912 vom Deutschen Kirchenausschuß genehmigten Text.
- 3) E. Nestle et K. Aland : Novum testamentum graec. 25., Aufl. 1967.
- 4) H. Moser : Deutsche Sprachgeschichte 5., durchgesehne Aufl. 1965. 20. Das Frühmittelalterliche Deutsch Zweite Lautverschiebung.
Fr. Tschirch : Geschichte der deutschen Sprache Zweiter Teil 2. verbesserte und vermehrte Aufl. 1975. IV . Die Zeit des Hoch-und Spät Mittelalters 27. Die Umgestaltung des mhd. Vokalismus.
- 5) A. Bach : Geschichte der deutschen Sprache 6. erweiterte Aufl. 1956. § 44. Die germ. Einzelsprachen.
前島儀一郎：オランダ語 I オランダ語略史（市河三喜・高津春繁編 世界言語概説上巻 昭和 55 年に収録）
「ドイツ言語学辞典」編集委員会：ドイツ言語学辞典 1994, オランダ語の項。
- 6) 塩谷 饒：ドイツ語学入門 1967, 第 1 章 ドイツ語の分布と系統 §4 ドイツ語の親族語。
塩谷 饒：ルター聖書のドイツ語 1975, 言語資料としての聖書 11)。
- 7) The Bible in Print Netherlandish Bible Illustration in the sixteenth Century by Bart A. Rosier

- volume I translated from the Dutch by Chris F. Weterings 1997. Chapter 2 : From Luther to Trent : 1522–1548 2. 1. New Testaments from 1522 until 1526.
- 8) 註 4) の Fr. Tschirch : Geschichte der deutschen Sprache Zweiter Teil 35. B. Geschichte und Verbreitung von Luthers Bibelübersetzung.
- 9) 1928 年刊行の調査テキスト : Bijbel dat is de gansche Heilige Schrift vervattende al de kanonieke boeken des Ouden en Nieuwen Testaments door Last van de Hoog Mog. Herren Staten Generaal der vereenigde Nederlanden 1928.
- 10) 1930 年刊行の調査テキスト : Het Nieuwe Testament 1930.
- 11) 1951 年刊行の調査テキスト : Bijbel dat is de gansche Heilige Schrift bevattende al de canonieke boeken des Ouden en Nieuwen Testaments op Last van de Hoog - Mogende Heren Staten - Generaal der Vereigde Nederlanden 1951.
- 12) Nieuw volledig Hoogduitsch - Nederduitsch en Nederduitsch - Hoogduitsch Woordenboek, naar de beste en nieuwste bronnen bewert. Tweede Deel. (Nederduitsch.) 1851.
- 13) 註 12) と同じ。
- 14) Duden - Oxford Großwörterbuch Englisch ; englisch - deutsch ; deutsch - englisch hrsg. von der Dudenredaktion und Oxford University Press Red. Leistung : Werner Schloz – Stubenrecht : John Sykes. 1990.
- 15) The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe 1972. Page 61.
- 16) W. R. Owens : Explanatory Notes to Pages 61–2. In : The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe 1972.
- 17) 菊池慎吾・鐵野善資 : 研究社 独和中辞辞典 1996. verloren (Ⅱ) 1
- 18) P. G. J. Van Sterkenburg・W. G. Boot・日蘭学会監修・講談社サイエンティフィックス : 講談社オランダ語辞典 1994.
- 19) Ralph Earle : The Gospel According to St. Luke Chapter 15 8. Three Parables Lostness In : The Wesleyan Bible Commentary vol. 4. 1964.
- 20) Ralph Earl 横山容子訳 : ルカの福音書 8 三つの失われたもののたとえ (一五 1–32)。ウェスレアン聖書注解刊行委員会編 : ウェスレアン聖書注解 新約篇 第 1 巻 マタイ–ヨハネ 1984 に収録。
- 21) H. Balg – G. Schneider (Hrsg) : Exegetisches Wörterbuch zum Newen Testament Bd. 1 1980. 並びに,
新井 献・H. K. マルクス (監修) : ギリシア語 新約聖書釈義事典 I 1933。
ἀσώτως, διασκοπιζω の項。
- 22) 引用の和文は日本聖書協会訳に依る。Luther 訳原典においては、1522 年 9 月刊行の初版と 1546 年刊行の版で、次の通りに訳出されている。
denn des menschen son ist komen zu suchen vnd selig zu machen das verloren ist. (1522.¹⁾)

Denn des menschen Son ist komen zu suchen vnd selig zu machen, das verloren ist (1546.)

Luther 訳原典の調査テキスト：D. Martin Luthers Werke Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe) Die Deutsche Bibel Bd. 6–12. (10 Bücher) Weimar 1919–1960.

新約正典は Bd. 6, 7, 旧約正典は Bd. 8–11. (7 Bücher), 旧約外典は Bd. 12 である。

- 23) Dictionary of english Quotations with examples of their use by modern authors Edited by S. Ichikawa, M. Nishikawa and M. Shimizu Reprinted with corrections 1968. The parable of 'the prodigal son' の項。

- 24) "The Appellation of 'the Prodigal Son' is current in allusive use elsewhere than in England, but only in English is there a substantive *prodigal* in the sense of one who has caused grief to his parents by abandoning his home."

この指摘は Robinson Crusoe の Prodigal にも当て嵌まるものである。

- 25) Henry Bradley 大塚高信譯：英語の成立 英語成立の助成者 昭和十七年。

- 26) An etymological dictionary of English language by the Rev. Walter W. Skeat, Litt D., D. C. L., L. L. D., Ph. D., F. B. A. 1909.

- 27) Le Nouveau Petit Robert 2009 de la langue française 2009.

- 28) 田川建三：書物としての新約聖書 1997。第四章 新約聖書の翻訳 エルサレム聖書。

- 29) C. W. T. Schuster und A. Régnier : Wörterbuch der Deutschen und Französischen Sprache Zweiter Theil Französisch = Deutsch 2., Aufl. 1859.

- 30) Walther v. Wartburg : Französisches Etymologisches Wörterbuch Photomechanischer Nachdruck 9. Bd. Placabilis – Pyxis. 1988.

- 31) A. Dauzat – J. Dubois – H. Mitterand : Nouveau Dictionnaire Étymologique et Historique 1964.

- 32) 小川治郎：ルカによる福音書注解 一五・一一 – 三二 放蕩息子と兄の譬。

増訂
新版 新約聖書略解 1965。

- 33) die Erklärungen zu Luk. 15, 11–32. In : Jubilaumsbibel mit erklärenden Anmerkungen Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach der deutschen Übersetzung Martin Luthers mit erklärenden Anmerkungen 1964.

- 34) eine Sammlung religiöser und kluger Sittensprüche である。(Der Volks Brockhaus. 1920.)

- 35) 出典は日本聖書協会：聖書・新共同訳 旧約聖書続編つき 1987。

Sir. 33, 12

Las dem son, der frawen, dem bruder, dem freunde, nicht gewalt vber dich, weil du lebest, vnd vbergib niemand deine güter, das dichs nicht gewewe, vnd müssest sie darumb bitten. (Jesus

Sirach 1533.)

Las dem Son, der Frawen, dem Bruder, dem Freunde nicht gewalt vber dich, weil du lebest,
vnd vbergib niemand deine Güter, Das dichs nicht gerewe, vnd müsstest sie darumb bitten.
(Bibel 1545.)

Sir. 33, 24

Wenn dein ende kompt, das du dauon must, als denn teile dein erbe aus. (Jesus Sirach
1533.)

Wenn dein ende kompt, das du dauon must, als denn teile dein Erbe aus. (Bibel 1545.)

- 36) die Erklärung zu Luk. 15, 12. In : Das Neue Testament Deutsch Teilband 3 Das Evangelium nach Lukas übersetzt und erklärt von K. H. Regenstorf 11., Aufl. 1966.
- 37) 小川治郎：ルカによる福音書注解 一五・一二。出典の新約聖書略解は註 32) に前述。
- 38) K. H. Regenstorf : die Erklärung zu Luk. 15, 15. 出典の Das Neue Testament Deutsch 3 Das Evangelium nach Lukas は註 36) に前述。
- 39) die Erklärung zu Luk. 15, 11–16. In : Stuttgarter Erklärungsbibel. Die Heilige Schrift nach der Übersetzung Martin Luthers mit Einführungen und Erklärungen 1992.
- 40) Das Neue Testament Interlineaübersetzung Griechisch – Deutsch Griechischer Text : Nestle – Aland – Ausgabe (26. Auflage) übersetzt von Dietzfelbinger 4. vom Übersetzer korrigierte Auflage 1990.
- 41) 註 21) に前述。
- 42) Vulgata : Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem. adiuvantibus B. Fischer osb, J. Gribomont obs, H. F. D. Sparks, W. Thiele. 3., verbesserte Aufl. 1993.
- 43) H. Menge : Menge – Güthling Enzklopädisches Wörterbuch der lateinischen und deutschen Sprache. Teil I : Lateinisch–Deutsch 12. Aufl. 1960.
- 44) W. Bauer : Griechisch – deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur 6., völlig neu bearbeitete Aufl. hg. von K. Aland und B. Aland 1988.
- 45) 註 22) に前述。
- 46) Zürcher Bibel の調査テキスト : Die Zürcher Bibel von 1531.
- 47) J. Grimm – W. Grimm : Deutsches Wörterbuch 2. Band Biermörder – D. 307 1860.
- 48) J. Grimm – W. Grimm : Deutsches Wörterbuch 11. Band II. Abteilung U – Umzingen. 833. Bearbeitet von V. Doolmayer und Arbeitsstele des Deutschen Wörterbuches 1936.
- 49) J. Grimm – W. Grimm : Deutsches Wörterbuch 12. Band I. Abteilung V – Verzungen. 1896. Bearbeitet von E. Wülcher, R. Meiszner, M. Leopold, C. Wesle und der Arbeitsstelle

des Deutschen Wörterbuches zu Berlin. 1956.

- 50) Bibel mit Apokryphen nach der Übersetzung Martin Luthers 1985. 旧約正典は1964年改訂, 旧約外典は1970年, 新約正典は1984年改訂の訳文を収めている。
- 51) Zürcher Bibel nach der Übersetzung Ulrich Zwinglis revidierter Text 1931, 2. Aufl. 1942.
- 52) 註 12) に前述の蘭独。
- 53) 註 14) に前述の英独。
- 54) 註 29) に前述の仏独。
- 55) ἀπόλλυμι は, Luther 訳とオランダ語訳で一樣に verlieren が対応されているのであるが, 厳密には, いなくなった羊と放蕩息子 の譬えに関しては verlorengehen の意味を, 無くした銀貨の譬えに関しては verlieren の意味を担っているのである。(註 44) に前述の Bauer – Aland : Wörterbuch zum Neuen Testament)
- 56) 註 43) に前述の Menge – Güthling の羅独。
- 57) 註 43) に前述の Menge – Güthling の羅独。
- 58) 註 44) に前述の Bauer – Aland : Wörterbuch zum Neuen Testament.
- 59) 註 43) に前述の Menge – Güthling の羅独。
- 60) Henry Bradley : The Making of English 1951. S. 224. Some Makers of English, footnote.
- 61) 註 25) で前述した大塚高信の譯書。
- 62) Vnd eyn schweyn spaltet wol die klawen, aber es widerkewet nicht, ist euch vnreyn. Von diser fleysch solt yhr nicht noch yhr ass anruren, denn sie sind vnreyn. (Luther 1523. 3. Mose 11, 7, 8)

Vnd ein Schwein spaltet wol die klawen, aber es widerkewet nicht, Darumb sols euch vnrein sein. Von dieser fleisch solt jr nicht essen, noch jr Ass anrûfen, Denn sie sind euch vnrein. (1545.)
- 63) Yhr sollt das heylthum nit den hunden geben vnnd ewere perlen solt yhr nit fur die sew werffen, auff das die selbigen nitt zur treten, mit yhren fussen, vnnd sich wenden, vnnd euch zu reysen. (1522.¹ Matth. 7, 6)

Ir solt das Heilighum nicht den Hunden geben, vnd ewre Perlen solt jr nicht fur die Sew werffen, Auff das sie die selbigen nicht zutreten mit jren Füßen, Vnd sich wenden, vnd euch zureissen. (1546)
- 64) 註 36) に前述の K. H. Regensterf : die Erklärung zu Luk. 15, 15.
- 65) Anton Steiner / Volker Weymann (Hrsg.) Gleichnisse Jesu II. Eingeladen zu offenem Leben Das Fest, das der Vater seinen Söhnen eröffnet (Lukas 15, 11–32) 2. 2 Sacherklärungen

- 66) 註 40) に前述の Das Neue Testament Interlinearübersetzung.
- 67) 註 44) に前述。
- 68) 註 21) に前述。
- 69) Fritz Tschirch : Probeartikel zum Wörterbuch der Bibelsprache Luthers 1964. Vorwort.
- 70) J. Grimm – W. Grimm : Deutsches Wörterbuch 5. Band K – Kyrie. 2477–8. Bearbeitet von Rudolf Hildebrand 1873.
- 71) 4 点の現代ドイツ語聖書は、塩谷 饒：ルター聖書 抜粋・訳注 1983. : Biblisch – Theologisches Handwörterbuch zur Lutherbibel und zu neueren Übersetzungen. hrsg. von E. Osterloh u. H. Engelland. 3., Aufl. 1964. 及び Handbuch zur Bibel. hrsg. von. D. u. P. Alexander. 7., überarbeitete Aufl. 1991. を参照して、諸家の見解を踏えて、選定した次第である。
 1. Hermann Menge : Die Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments. 11. Aufl. 1961.
 2. Das Neue Testament Teilband 3 Das Evangelium nach Lukas übersetzt und erklärt von Karl Heinrich Regensterf 11., Aufl. 1966.
 3. Die Bibel Altes und Neues Testament in neuer Einheitsübersetzung. 5 Bände mit 3500 Farbbildern herg. von Sr Dr. Miryam Prager OSB. und Univ. – Dog. Dr. Günter Stember 4. Aufl. 1976.
 4. Die Bibel in heutigem Deutsch Die Gute Nachricht des Alten und Neuen Testaments. 2., durchgesehene Aufl. 1984.
- 72) 日本聖書協会：舊新約聖書 文語訳 1887 2009。
- 73) 日本聖書協会：聖書 1961 旧約は 1955 年改訳、新約は 1954 年改訳。
- 74) 日本聖書刊行会：聖書・新改訂 1971 旧約は 1970 年改訳、新約は 1965 年改訂。
- 75) 塚本虎二訳：新約聖書 福音書 1963。
- 76) 岩隈 直：希和对訳脚注つき新約聖書Ⅲ β ルカ福音書^下 1991。
- 77) フランシスコ会聖書研究所：聖書 原文校訂による口語訳 ルカによる福音書 1975。
- 78) 註 77) のフランシスコ会聖書研究所：ルカによる福音書「放とうむすこ」の註。
- 79) 出典は註 35) に前述の新共同訳。
- 80) 田川建三：新約聖書 訳と註 2 上 ルカ福音書 2011。
- 81) Michal Zohary : Pflanzen der Bibel. 3., unveränderte Aufl. 1995. Teil II Die Pflanzen der Bibel 1 Obstbäume Johannisbrotbaum. (本書は Plants of the Bibel. 1982. のドイツ語版である)

- 大槻虎男：聖書の植物 1974. イナゴマメ ヨハネのパン。
- 82) 中島路可：聖書の植物物語 2000. いなごまめ。
- 83) Sir Willam Smith 藤本時男編訳：聖書植物大事典 2006. HUSK 莢
- 84) 註 69) の Fr. Tschirch の Probeartikel zum Wörterbuch der Bibelsprache Luthers Treber の項。
- 85) 註 12) に前述の蘭独。
- 86) 註 85) と同じ。
- 87) 註 14) に前述の英独。
- 88) 註 87) と同じ。
- 89) 註 29) に前述の仏独。
- 90) 註 89) と同じ。
- 91) *είσεαυτὸν ἐρχομαι* (*ἐλθών* はその第二不定過去分詞)。「われ(正気)に帰る, 迷いから覚める」, ヘブル語, アラム語で「悔改める」意 (J. Jeremias 「イエスの譬」130 頁) (註 76) に前述の岩隈 直：ルカ福音書^下 15 17)
- 92) 註 40) に前述の Das Neue Testament Interlinerübersetzung.
- 93) Albrecht Dürer : Der verlorene Sohn um 1496. In : Die Bibel nach der Übersetzung Martin Luthers mit Meisterwerken aus dem Zeitalter der Reformation 2000.
- 94) R. Earle の原著は註 19) に, 横山容子の邦訳は註 20) に前述してある。
二つの諺は R. Earle では, 次の通りに訳出されているのである。
1. Wenn the Israelites are reduced to eating carobpods, they repent.
 2. Wenn a son (abroad) goes barefoot (through poverty), than he remembers the comfort of his father's house.
- 95) Schmidt, Kiel : Treber. In : Biblisch – Theologisches Wörterbuch zur Lutherbuch und zu neuen Übersetzungen (本書は註 71) に前述)
K. H. Rengstorf : die Erklärung zu Luk. 15, 16. 出典の Das Neue Testament Deutsch 3 Das Evangelium nach Lukas は註 36) に前述。
- 96) Sprichwort In : Brockhaus Enzyklopädie in 30 Bänden 21., völlig neu bearbeitete Aufl. Band 26 Spot – Tala 2006.